

薔薇十字叢書
天邪鬼の輩

著：愁堂れな
Founder：京極夏彦



富士見L文庫

あまのじゃくのともがら

目次

天邪鬼の輩

あとがき

天邪鬼〔あまのじゃく〕

昔話や伝説の他、神話や仏教説話などにも登場する小鬼のような妖怪。寺門の仁王像や毘沙門びしゃもんてん天てんの像に踏みつけられている小鬼も天邪鬼とされる。神話や仏教の世界では、神の正しさを示すための格下の悪役というような役割として登場するが、民間説話での性質は地方により異なってくる。

一般的には、人の意に逆らい、他人の心中を察する能力に優れ、口真似や物真似をして人をからかう妖怪とされる。(以下略)

(角川文庫『日本妖怪大事典』より)

「ねえ、君。この世には不思議なことなど、何もないのだよ」

父母共に教師だったためだろう。僕にとって『勉強』は日常だった。

父からも母からも、『勉強しなさい』ときつく言われたことはない。それでも四年で中学を終えて一高に入学、やがて帝大へ——という道を進むであろうことは、自分の中でなんとなく決まっていたような気がする。

僕自身、特別望んではいなかったものの、その道を進むことに何ら疑問を覚えていなかった。中学までは『成績優秀者』であったので、教師もまた、なんの疑問もなく僕の一高受験を後押ししてくれた。

合格通知が来るまでは、それでも多少は緊張していた。父も母も合格を微塵も疑っていなかったからだ。

不合格だったらきつと両親はがっかりする。親不孝はしたくないなと思っていただけに、合格とわかったときには心から安堵あんどはしたが、特別嬉うれしくも誇らしくも感じなかった。意識していないところでは『当然』と思っていたのかもしれない。不合格だとしたら『運が悪かったせいだ』と普通に考えていたくらいだ。

まったく自覚はしていなかったが、勉強に関して天狗てんぐになっていたようだ。いつの間にか高くなっていった鼻を、一高に入学した途端ポキンと折られ、僕はすっかりやる気を失ってしまった。

まだ意識的に天狗になっていたのだとしたら、反省もしただろうし、努力をしようとも思えただろう。でも僕の場合は違った。

学年で五番以下をとったことのなかった僕の、入学して最初の試験の成績は下から数えたらほうが早い順位だったし、授業の内容は半分くらいしか理解できなかった。

落ちこぼれるという体験をしたことがなかった僕にとって、それは衝撃的といっている出来事だった。体験がないだけに、解決策がわからない。その上、人見知りの僕は新しい環境に慣れるのに時間がかかるのが常で、そのため友人と呼べる生徒は学内にはまだ一人

もいなかった。

それなら親に相談を、と思っても全寮制であるので、ちよくちよく帰宅できるものでもない。加えて一高の独特といつていい雰囲気、僕を更に追い詰めていた。

一高といえは蛮カラ氣質かたぎ。多くの生徒が白線帽をかぶって黒マントを羽織り、林歯はやばの下駄を履く『一高スタイル』ともいうべき服装を好んだ。豪快であること、男らしくあることがよしとされ、覇気が無いという理由だけで馬鹿にされる。

覇気があったことなど生まれてこのかた一度もなかった僕を相手にしてくれる同級生はいなかった。授業中に指されても、あーとかうーとかしか言えずに立ち尽くすばかりであったため、早々に教師にも見放された。

しかも寮は六人部屋。気の休まる時がない。風呂も一緒、食事も一緒、その上皆が皆一つ一つの動作が物凄く速いのである。のろまだという自覚はなかったが、彼らのスピードにはまったくついていかれず、次第に僕は、内へ内へともるようになった。

何をするにもやる気が出ない。勉強しかり、運動しかり、比較的好きな読書すら、図書館に行くのが億劫おつうで本を開くこともなくなった。

食欲は落ち、夜もよく眠れない。身体が怠だるくて寝台から起き上がるのもつらくなる。

ある朝、いよいよ起きられなくなり、皆が食堂に行く声を聞きながら僕は上掛けを頭か

ら被かぶっていた。

同室の誰一人として、僕に声をかけてくれる者はいない。そのことを寂しいと思うより、どちらかというとはっとしていた。皆が口々に騒ぎながら部屋を出ていくのをやり過ごし、ドアが閉まる音を聞いてから、やれやれ、と溜ため息交じりに身体を起こす。

「……っ」

途端に、寝台の脇に立ち、僕をじっと見下ろしている同級生と目が合い、ぎょっとした。全員が出ていったと思ったのに、と再び上掛けを引つ被からうとしたそのとき、同年代にしては低い、だがよく響く声が僕の名を呼んだ。

「関せきぐち口君……だったかな？ 起きたまえ。食事の時間が終わってしまっ」

「……え……っ」

頭の上まで引つ張り上げていた上掛けを下ろし、彼を見る。

顔色が悪く、酷ひどく瘦やせている。身長は僕と同じくらいか。人のことは言えないが、貧相といつていい体つきだ。

知的ですっとした顔立ちだが、なんていうんだろう、凄く不機嫌そうだった。ああ、そうだ、仏頂面というのだ、と僕が思いついたのと、彼が口を開いたのが同時だった。

「阿呆あほうのように口を開けていないで。さあ、行くよ」

「あ、あの、君は……」

言いやうも失礼だったが、何よりまるで僕が彼の命令というか誘いというか、それに従うと疑いもしていないことに戸惑いを覚え、その理由を問おうとした。と、彼はますます仏頂面になり、きつい語調で問いかけてくる。

「なんだね、もしや君、僕の名前を問おうとしているのかい？」

「な、名前は知ってる。確か……」

言いかけた僕の声に被せ、不機嫌極まりない口調で彼は己の名を告げた。

「中禅寺だ。中禅寺秋彦。関口巽君、さあ、食堂に行こう」

中禅寺秋彦。『中禅寺』という名字は勿論知っていたが名前までは把握していなかった。とはいえ彼のことを知らない生徒は同級生ではまずいと思われる。

化学の最初の授業で彼は、教師に向かって堂々と、

『その学説は古い』

と指摘し、教師は憤怒の余り絶句してしまった。黙り込む教師のかわりに中禅寺は滔々と彼言うところの新しい学説を説明し始め、生徒ばかりか教師までもが彼の説明に聞き入ることとなったのだが、痛快なその噂が瞬く間に全校に広まったためである。

理知的で痩せた容貌が芥川龍之介の肖像に似ていると同級の誰かが言い出したのだが、

秀逸だ、と皆の認めるところとなり、それから暫くの間、中禅寺のあだ名は『龍之介』となつた。

入学早々、一躍人気者になつた彼だったが、彼自身は実に淡々としていた。また教師をやり込めてやれ、と囃し立てられても、

『したいなら君がするとい』

と中禅寺は相手にしなかつた。

普通であればそうした態度は反感を買いかねないものだが、なぜだか中禅寺に関してはそれはなかつた。皆が彼に一目置いていたせいかもしれない。

彼とは一度も口を利いたことはなかつたと思う。なのにいきなり声をかけられ——しかも、命令とまではいわないけれど、断ることはあるまいという調子で告げられ、僕は動揺してしまっていた。

「ぼ、僕はいいよ……」

とりあえずは断ろう。一度断れば彼も無理強いはしないだろう。どう考えても彼が僕を食堂に連れていく義理はない。

あ、もしかしたら寮長に頼まれたのだろうか。そうじゃなければ教師に？ いや、それはないか。寮長も教師も、僕のことなど眼中にはないはずだ。

だとしたらなぜ——？ 疑問を覚えながらも僕は再び上掛けを頭から被ろうとしたのだが、それはかなわなかった。やれやれ、といわんばかりの溜め息をつきながら、中禅寺が手を伸ばし、僕から上掛けを剥ぎ取ったからだ。

「な……っ」

「いい加減にしたまえよ。さあ、すぐ仕度をするんだ。一分だけなら待ってやる。僕も朝食を食いはぐれるのはまっぴらだ」

そう告げる中禅寺の顔は、『仏頂面』なんてもんじゃなく、般若はんにやのようだった。怖くて悲鳴を上げそうだったが、黙っているのはもっと怖くて、ほぼ反射的に僕は上掛けを再び奪い取り、こう叫んでいた。

「ほ、放っておいてくれよ」

「放っておけない。いいか？ よく考えてみたまえ」

またも僕から上掛けを剥ぎ取りながら、中禅寺が淡々と説明を始める。

「君は今、鬱ふさ状態にある。鬱というのは伝染するんだ。君一人が鬱々としていているのなら目も瞑つぶるが、まずは同室の皆に、そのうちに学年中に蔓延まんえんすることになりかねない。そうだった場合、一人一人を更生させるのは面倒だ。悪い芽は早い内に摘んでおくに限る。だからこそ、今僕は君を朝食に誘っているのだ。わかるかね？ 関口君」

まさに立て板に水の如く喋しゃべり続ける中禅寺の前に、僕はただただ言葉を失っていた。

「わからずともいい。さあ、速く仕度をするんだ」

呆然ぼうぜんとするあまり僕は、中禅寺に言われるがままに布団から起き上がり、制服を着始めてしまっていた。

中禅寺と僕が食堂に向かうと、ほとんどの生徒は食事を終え、席を立つところだった。遅いぞ、と言いたげな彼らの視線をまったく無視し、中禅寺が僕を促し席に着く。

すぐさま白服の給仕が僕たちの朝食を運んでくれる。

「授業までの時間はまだある。ゆっくり食べよう」

中禅寺はそう言ったかと思うと、いただきます、とまるで独り言のように告げ、箸はしを動かした始めた。僕もまた箸を取り上げるも、食欲がなく、なかなか白飯を口へと持っていくことができない。

「無理には言わないが、食べたほうが授業に身が入るぜ」

向かいに座る中禅寺は、僕を見るでもなく、淡々とした口調でそう言うと、黙々と食べ続けた。ふと見ると、器用に箸を操る細く長い指が目に入り、少しの無駄もない、それでいてせわしくも感じられないその動きに僕は暫し見惚みとれてしまった。

普通に食事をしているだけのはずなのに、他の生徒とはまるで違う。優美とわかっていい

指の動きはあたかも魔術師かマジシャンの動作のようで、いつしか僕は視線を外せなくなっていた。

「関口君、君、口を開けているのなら食べたまえよ」

視線をうるさく思ったらしい中禅寺が顔を上げ、僕を睨む。

「ご、ごめん」

バツの悪さから僕は顔を伏せ、慌てて箸を動かした。結果、白飯をかつ込むことになったのだが、口に入れてみると温かなご飯はとても美味しく、一気に食欲が湧いてくるのを感じ、その後は僕も無心で箸を動かし続けたのだった。

食事を終え、僕たちは授業の仕度をしに一度寮の部屋へと戻った。

既に同室の生徒たちは皆、教室へと向かっていた。教科書を揃えながら、思わず溜め息を漏らしてしまったのは、これから教師が何を言っているのかさっぱり理解できない苦痛の時間を迎えることになるためだったのだが、微かな溜め息を聞きつけたのだろうか、中禅寺が仕度の手を止め、僕に声をかけてきた。

「ねえ、関口君。君にまじないをしてあげよう」

「ま、まじない？」

いきなり何を言いだしたのか、と驚く僕にかまわず、中禅寺は僕を真っ直ぐに見つめ、

こう続けたのだった。

「いいか？ 教師は皆、日本語を喋っている。理解できないわけがないんだ」

「それはそうだけれども……」

そんなことくらいはわかっている。だが、知識が追いついていかないのだ、と言いつ返しとした僕の言葉に被せ、中禅寺は尚も喋り続けた。

「君は最初から耳を塞いでしまっているんだ。耳から入らないものが頭に入るわけがない。今日は先生の口元だけを見つめ、ただ話に耳を傾けることにのみ集中するんだ。わかったね？」

「……………」

わかったね、と問われたとき、僕の頭に最初に浮かんだ言葉は『わかるか』という反発だった。

だが、それを口に出すことができなかったのは、中禅寺の眼差しに声を奪われてしまったせいだった。

瞳を通して、頭の中まで、胸の奥の奥まで見透かされているような気がする。睨まれていくわけでもないのに、臆してしまっているその理由は、その『見透かされている』感によるものと思われた。

「わかったね。じゃあ、行こう」
 返事もできないでいた僕だったが、中禅寺が視線を外し、そう告げたのに、ようやく自分を取り戻した。

「う、うん……」
 ただ教師の口元を見つめ、話に耳を傾けることだけに意識を集中させる。そんなこと、できるわけがないし、できたとしても内容が難しすぎて理解できないのだから、聞いたところで一緒だろう。

授業が始まるまでは僕はそう考え、中禅寺の『まじない』をまるで信じていなかった。とはいえ、指示どおりにしないとというのはなんとなく気が引けてしまい、一時限目で僕は中禅寺に言われたとおり、教師の口元だけを見つめ、話を聞くことにのみ意識を集中させてみた。

結果——昨日までさっぱり理解できなかった授業の内容が、驚くほどスムーズに頭に入ってきて、我がことながら僕はただただ驚いてしまった。

二限目も、三限目も、教師が何を言っているか、きっちり理解することができた。どうやら僕は中禅寺の言ったとおり、端から教師の言葉に耳を塞いでいたようだ。確かに先生が話しているのは日本語だし、一〇〇パーセント理解できないわけがないのだという、あ

まりにも当然のことに、僕はようやく気づくことができたのだった。

昼食の際、僕は中禅寺に近づき、礼を言った。

「ありがとう。おかげで授業が理解できるようになったよ」

「それはよかった」

中禅寺はにこりともせず、実に淡々と僕の感謝の言葉を流すと、

「さあ、食堂へ行こう」と急かしてきた。

「でも不思議だ。どうして君には僕が授業を理解できない理由がわかったんだい？」

並んで歩きながら問いかける。と、中禅寺は一瞬だけ足を止め、僕を真っ直ぐに見つめると、意味がわかるようでわからない言葉告げたのだった。

「この世にはね、不思議なことなど何一つないものなんだよ」

「え？」

それが答えというのか。戸惑いの声を上げた僕もまた足を止めてしまったのだが、そんな僕を見て中禅寺は少々苛ついた様子になると、

「早く食堂に行こうじゃないか」

と速い歩調で歩き出し、僕は慌てて彼のあとを追ったのだった。

それからなんとなく、僕は中禅寺と共に過ごすようになった。学内で一人として友人のいなかった僕にとって、初めてできた『友人』は中禅寺だった。

中禅寺側では、僕のことをどう思っていたかはわからない。彼にとっての『友人』の定義が僕にはわからないからだ。

彼と一緒にいると、いろんな人から声をかけられた。同級生、先輩、教師もまた例外ではなく、皆が皆、雑談というよりは相談だったり、議論をふっかけてきたりと、長時間の会話を彼と持ちたがっているようだった。

『ようだった』というのは、中禅寺はあまりそれを望んでいないらしく、いつもいいように相手を言いくるめて帰ってしまうため、一人として面談時間を五分以上継続できないのだ。

そうした相手を中禅寺は『友人』と思っているのか、思っていないのか、聞いたことがないのでわからない。ただ、彼らに対する態度も僕に対する態度もまるで差がないため、もし中禅寺が彼らを友人だと思っているのだとしたら、僕もまた彼の友人の一人であり、『知人』くらいにしか思っていないのだとしたら、僕も同じく『知人』であるに違いなかった。

中禅寺が僕に声をかけてくれた日から一週間ほど経過したある日、元気を取り戻しつつ

あった僕は一人図書館に向かっていた。今まで中禅寺と共に心理学の授業に出ていたのだが、授業の最中、中禅寺が挙手して質問した、その内容について教授と議論になり、授業後に研究室まで連れていかれてしまったのだった。

読書する気力が戻ってきたのはありがたかった。さて何を読もうか。いびきまよひか泉鏡花でも久々に読み返してみようかなと思いついていたそのとき、不意に目の前に人影が差したのに驚き、足を止めた。

「おい、君、ちょっといいか？」

近道をしようと、校舎の裏手を突っ切っていたのだが、渡り廊下が切れたところ、建物陰からわらわらと数名の生徒たちが現れたかと思っっているうちに、僕は彼らに取り囲まれてしまった。

一人として見知った顔はいない。いや、どこか見覚えがあるような気もする。上級生らしい彼らは、皆が皆、むっとしているように見えた。

怒りの対象はどうやら僕らしく、全員が僕を睨んでいる。彼らの怒りの原因には少しの心当たりもなかっただけに、何が起こっているのか今一つ理解できず、僕は声を失ったまま、ただその場に立ち尽くしていた。

「関口とかいったな。いい加減にしるよ？」

「……………」

何を『いい加減』にすればいいのか、まったくもってわからない。僕にそう告げたのは、『蛮カラ』を地で行く、背も高くガタイもいい上級生だった。身体だけではなく声も大きい。迫力ある怒声を上げられた上に大きな目でぎろりと睨まれ、ますます僕は言葉を失っていった。

『関口』と呼びかけられたところをみると、人違いではなさそうだ。しかし本当に心当たりはない。立ち尽くすうちに、また別の、今度はガタイはあまりよくないものの、背は先ほどの先輩よりも高い、黒縁眼鏡の先輩が甲高い声で僕を罵り始めた。

「君ね、少しは気を遣ったらどうだい？ 君がべったり中禅寺君の傍に居るおかげで、これだけの人間が迷惑していると思ってるんだね」

「……………え……………」

いきなり出てきた中禅寺の名に驚いたせいで、ようやく声が出た。と同時に、そういうことか、と彼らの待ち伏せの理由を察したのだった。

記憶を辿れば、どの顔も一度は見たことがあった。最初に僕に怒声を浴びせたギョロ目の先輩と、今の黒縁眼鏡の先輩は、三、四度は中禅寺に声をかけていた気がする。ギョロ目のほうは、千日回峰行せんじちちがいはくほうぎょうについての見解を聞きたいという話題で、黒縁眼鏡は以前、中禅

寺が教師を論破した化学の授業内容についてだった。

中禅寺は愛想のいいほうではないが、感じの悪い対応をすることは誰に対してもなかった。傍目はためにもこの二人は明らかに中禅寺に対し、議論をふっかける気満々で、面倒くさそうだなと思っていたのだが、中禅寺にこの二人を持って余している様子はなかった。

持て余すどころか、ふっかけてくる議論を鮮やかにかわし、パッと見、斜め上とはわからない方向へと水を向ける。彼らが虚を衝かれている間に話題を切り上げたり、他の人との話を始めたり、と、今改めて思うと中禅寺は実に見事に彼らをはじめ、議論をふっかけてくる相手をやり過ごしていた。

『そのうちに露呈しそうだな』

いつだったか、中禅寺がぼそりとそんなことを呟つぶやいていた記憶が蘇よみがえる。いつまでも誤魔化していられるわけもない、というニュアンスで告げられたその言葉は、もしやこのことを言っていたのか、とそこまで察しはしたものの、察したところで今の状況を打破する方策は一つも思いつかなかった。

「だいたいなんだって中禅寺はお前とばかりつるんでいるんだ？ 中学時代、一緒だったわけでもあるまい？」

「聞けば君は取り立てて利発なわけでもなく、どちらかといえば劣等生だそうじゃないか。

君の世話を焼かねばならない理由はなんだ？ 中禅寺君も有益な時間を君の面倒を見ることに割かれて、随分と迷惑をしているんじゃないのか？」

僕を責め立てているのは主に、ギョロ目と黒縁眼鏡だった。が、他の皆も思いは同じらしく、そうだそうだ、とまわりで囃し立てている。

実際、中禅寺が僕の世話を焼いているかとなると、最初のうちこそ食堂に無理矢理誘われはしたが、今はただ行動を共にしているだけである。それこそが『世話』だろうと指摘されれば、そうですか、としか答えようはないが、中禅寺本人に指摘されるのならともかく、まったくの部外者に言われても特に、反省する気にはなれなかった。

とはいえ、反論する勇氣もない。どうすれば彼らの気は済むのか。大人しく『わかった』と返事をしておけばいいのだろうか。しかしそれは当座しのぎにすぎず、後々面倒なことになるだろう。

だとすればどうしたら——じっくり考えたいが、僕を取り囲んだ先輩たちに口々に不満の言葉を突きつけられ、思考がまったくまとまらない。どうしよう、どうしよう、と焦るばかりの僕は、いつしか先輩たちの迫力に押され、植え込みのあたりまで後退させられてしまっていた。

「さあ、誓うんだ。もう二度と、中禅寺には迷惑をかけない」と

「彼の貴重な時間を独占しないと、我々に誓いたまえ！」

ギョロ目が、黒縁眼鏡が、他の先輩たちも皆して僕に承知の返事を強要する。まったく『承知』できてはいないが、今はそう答えるしかないかと諦めかけたそのとき、思いもかけない出来事が起こった。

「煩いなあ。さっきから何をくだらないことを愚図愚図言ってるんだ」

植え込みの背後から、大欠伸と共に実に呑気な声が響いてきたのである。

「なんだと？ 誰だ、貴様っ」

それを聞き、ギョロ目が怒声を張り上げる。が、昼寝をしていたらしい声の主が身体を起こし、立ち上がって姿を現した途端に、彼はヒッと悲鳴のような声を上げ、その場で直立不動となった。

他の皆も同じような状態で立ち尽くしている。僕はちょうど植え込みを背にしていたため、その人物の顔をまだ見ていなかった。畏怖の念としかいいようのない表情を浮かべる先輩たちの視線を追い、振り返る。

「……え……」

僕の視界に飛び込んできたのは——この世のものとはにわかには信じがたい、美しい姿をした人間だった。

巨大な西洋の骨董人形——ビスクドール、と言うんだったか——がそこにいる。それがまさに僕の第一印象だった。

こんな美しい人間を見た経験はない。幼い頃、生まれて初めて外国人を見たときに、寶石のごとく美しい青い瞳と白い肌に衝撃を受けたことを思い出す。今、僕が目の前に行っている人物もまた、まるで外国人のような白い肌と色素の薄い鳶色の瞳の持ち主だった。

身長は六尺以上ありそうだった。美しくはあるが、ひ弱な感じは微塵もない。ギリシャ神話の太陽神アポロンのごとき美青年、という表現が一番しっくり来る気がする。いつしか僕は、今、自分が置かれている状況や立場をすっかり忘れ、唐突に目の前に現れた美貌の青年に目が釘付けとなっていた。

阿呆のように口を開けて見ていたせいだろうか。視線に気づいたららしいその美貌の青年が、僕を見る。

カチ。

視線が合った音が聞こえる錯覚が僕を襲った。美しすぎる鳶色の瞳からますます目が離せなくなる。

「ふん」

と、美貌の青年が鼻を鳴らし、僕から目を逸らした。びく、と身体を震わせたのは僕だ

けではなく、ギョロ目や黒縁眼鏡を始め、その場にいた皆がいつせいに姿勢を正す。

「今、『誰だ、貴様』と言ったのはお前か？」

美貌の青年がすつと手を上げ、ギョロ目を指さす。

「あ、あの、その……っ」

慌てた様子で首を横に振るとギョロ目は、青年に向かって、額が膝につくほど深く頭を下げた。

「し、失礼しましたっ！ 榎木津さんがいらしたとはつゆ知らず、騒ぎ立てましてっ」

榎木津——聞き覚えがあるようないないな、と記憶を辿ろうとしていた僕の前で、その榎木津がまた、ふん、と大仰に鼻を鳴らした。

「昼寝の邪魔をされて迷惑だ」

「も、申し訳ありませんでしたっ」

ギョロ目も、黒縁眼鏡も揃って深く頭を下げると、

「失礼しますっ」

「申し訳ありませんっ」

口々に謝罪の言葉を叫びながら、その場から駆け去っていつてしまった。

「……………」

あつという間の出来事すぎて、把握するのが追いつかず、僕はただただぼかんと口を開けその場で立ち尽くしていた。

「馬鹿者が」

美しい青年が——榎木津が、全力疾走しているせいであつという間に小さくなっていく生徒たちの後ろ姿に、ぼそりと呟いたかと思うと、不意に視線を僕へと向けてきた。

「……あ」

再び鳶色の瞳に見つめられる僕の頬に血が上ってくるのがわかる。『まじまじ』という表現がびつたり、真っ直ぐな視線を浴びるうちに鼓動はますます高鳴り、ただでさえ働かない思考力は殆どゼロになっていた。

とてつもなく自分が緊張している自覚はあった。が、理由はよくわからない。榎木津が綺麗過ぎるのか、そもそも人から見つめられたことがないため、無遠慮すぎる視線に戸惑いを覚えたせいなのか。

なんにせよ、一人、ゆでだこのように真っ赤になり、あわあわするばかりで何も言えずにいた僕は、尚も榎木津に見つめられるうちに、もしや、彼は怒っているのでは、という可能性に気づいた。

突然のことに動揺してしまっていて今の今まで気づかなかったが、明らかに僕は今、榎

木津に助けられたのだ。先輩たちに責め立てられていたところを救ってやったというのに、礼の一つも言えないのかと、むっとしているのではないだろうか。

「あ、あの……っ」

礼儀知らずにもほどがある。すぐさま礼を。いや、その前に謝罪を、と混乱しまくっていたため、ますます頭に血を上らせていた僕は、我ながら素っ頓狂といってもいいような声を発してしまったのだが、ほぼ同時に榎木津もまた、僕を見つめたまま、予想外すぎる言葉を告げたのだった。

「君は猿に似ているね」

「……………は……………?」

キミハサルニニテイルネ。

笑いもせず、まじまじと僕の顔を見ながら榎木津が告げたその言葉の意味を正しく理解するまでに、数秒の時を要した。

「それじゃあね、サル君。僕は寝る」

その間に榎木津は、にこりともせず僕の肩をポンと叩くと、彼が現れた植え込みのほうへと戻っていった。

「あ、あの……」

ようやく我に返った僕は、榎木津の背に声をかけようとしたのだが、既に彼の長身は植え込みの向こうに消えていた。おそらく芝生となっているそこで横になったのだらう。長い足が植え込みと植え込みの間から見える。

礼を言いに行こうという気持ちは、僕の中からすっかり消えていた。感謝の念が消えたというより、度肝を抜かれたから、という理由で、何がなにやらわからない、といった呆然^{げん}自失状態に僕は陥ってしまった。

猿に似ている、などということは今まで言われた試しがなかった。猿か、といつしか頬に手をやっていた僕は、指先が触れた自身の頬が未だに燃えるように熱いままでいることに気づき、なるほど、と半ば納得した。

猿の顔は赤い。しかしだからといって面と向かって『猿に似ている』はなかなか失礼だと思う。

失礼といいつつ、あまり腹が立たないのは、言った当人の榎木津が際立って綺麗な顔をしているためだった。美貌は正義。彼くらいの顔の持ち主であれば、他人の容姿を擲^{ちやく}擻^{さく}したとしても、充分許される、とごくごく自然にそう思えた。

時間にすればほんの十分にも満たない間の出来事だというのに、何から何まで予想外で、しかも何から何まで唐突な幕切れを迎えたために、一人取り残されたような気分から僕は

なかなか脱することができなかった。

最早、図書館に行く気力も失せていたため、寮に引き返そうとしたのだが、やはり礼くらはいは言っておいたほうがいいか、と考え直し、植え込みを振り返った。

こっそり近づいていくと、寝息が聞こえる。この特徴的な先輩がなぜに皆からああも恐れられていたのか、その理由をあとで中禅寺にでも聞いてみよう。そう思いながら僕は、彼の眠りの妨げにならないよう近づいたときと同じく足音を忍ばせ、その場を離れたのだった。

続きは、10月15日発売の富士見し文庫で！

(C)Rena Shundooh, Natsumiko Kyogoku 2015